

従軍画家たちが描いた戦時中の蘇州

——戦地記録画の図版データの記録——

彭 国 躍

1. はじめに

近年戦前の従軍画家に関する著書、研究論文や資料集などの刊行物が著しく増えている。しかし、当時の従軍画家の規模（人数や作品数）に比べると、調査はほんの序の口にすぎないという感は否めない。向井潤吉は1938年8月号の『美術』に掲載された随筆「従軍画家私義」の中で「僕は去年の十月十四日に〇〇の〇〇〇宣伝班から貰った腕章が北支だけですすでに四三二號だったからその後を考へ、又上海方面のそれらの人達を加算すると一ヶ旅團位は優に編成出来るかも知れぬほどの賑やかさである」（p6）と記している。その後の数年間の参加者、そして中国の「北支」（華北）以外の地域（華中、華東、華南）に従軍した画家たちを入れれば、少なく見積もっても432人の3倍、その中から新聞記者やカメラマンなどを差し引いた画家だけでも千人規模に達していたのだろうと推測できる。これほどの画家たちが戦争の相手国に押し寄せる光景は日本美術史上のみならず、世界美術史においても未曾有と言っても決して過言ではない。

筆者は、これまで彭（2013a, b, 2015a, b, c, 2017）を通して画家の一人ひとりにフォーカスをあて、それぞれの従軍経路の追跡と作品図版の整理を行ってきたが、本論ではこれまでとは異なる視点、つまり特定の地域が描かれた作品図版という視点でデータの記録と整理を行いたいと思う。

画家にフォーカスをあてる調査では特定の画家がいつごろ、どの地域に行き、どんな作品を描いたかを明らかにできるが、地域にフォーカスをあてる調査では、特定の地域にどういった画家たちが訪れ、それぞれどのような作品を描いたかを明らかにすることができる。そして、地域別の調査方法により日本美術史に名が刻まれない画家たちや、従軍作品図版がわずかにしか残されない画家たちの活動が浮かび上がり、史実の調査に新たな可能性が開けるのではないかと思う。

2. 蘇州を描いた従軍画家と作品図版の概観

2.1 画家の「中支」従軍経路と蘇州

蘇州は春秋時代（BC770～BC403）の呉の国の都が置かれた中国東部の古い町である。上海の約100キロ離れた西側に位置し、太湖の水が海に流れる経路にあたり、市内には運河が巡らされる「水の都」として知られる。戦前日本から中国の中東部地域へのアクセスは東部沿岸から入ることが多かったようだが、蘇州は、海路で上海に着いた後内陸に移動し南京に向かう場合の通過町でもあり、戦時中多くの「中支従軍」の画家たちがそこに立ち寄っていた。

当時の日本で使用された「中支」という地域名称は中華民国時代（1912～1949）の「華中地区」に相当し、現在中国大陸で言う「華東地区」の上海市、江蘇省、浙江省、安徽省、江西省、「華中地区」の

湖北省の地域と大方重なる。以下、文献記録の引用以外は現在の名称を使用する。図1はかつての「中支」の大半地域を示す Google マップで、蘇州とまわりの都市との位置関係を理解する目安となる。

図1 蘇州



2.2 図版の収集方法と出典

図版の収集は主に以下の2つの基準に基づいて行う。

- (1) 画題に蘇州にかかわる地域名や施設名が含まれること。
- (2) 画家たちの従軍活動に関連する作品であること。

この2つの基準を満たした作品の図版はすべて収録するが、どちらかを満たさない作品、つまり風景内容は蘇州らしいがそれと特定できるような題名がない作品（古島松之助の「クリーク」、熊岡美彦の「古塔回春」など）や、画家の従軍事実が不明なものまたはその可能性を想定する根拠がないもの（天野大虹の「蘇州城外」、中村霞亭の「蘇州北寺塔」など）、さらに従軍画家が描いた蘇州関連作品ではあるが、絵画の内容は従軍期間中の活動に関連がないもの（三上知治の「蘇州上空戦」など）はすべて収集の対象外とする。一方、画家の従軍記録やフルネームが確認できないが、図版出典の性格や作品内容から従軍関連の可能性が見込まれる作品（佐藤一章の「蘇州平和来」や與條の「蘇州寒山寺」など）は収集の対象とし、そして画題に蘇州関連の名前はないが、画中の内容や他の作品との関係で蘇州と特定する根拠のある作品図版（小林万吾の「林泉」や五味清吉の「中国風景」など）は収集の対象とする。

図版の調査は以下の3種類の資料に基づく。

(1) 戦時中に発行された絵葉書。戦時中従軍画家の作品は、聖戦美術展、海洋美術展、二科展、新文展、一水会展など各種美術展関連の絵葉書として、特に1937～40年の間に陸軍恤兵部や陸軍美術協会などによる軍事郵便用の絵葉書として印刷されていた。筆者所収の戦前絵葉書（絵入封筒を含む）だけでも211名の従軍画家の1251種類の作品に及んでいる。従軍画家だった南薫造の日記や永瀬義郎の自伝などに記載されるように、従軍中の旅費や宿泊費はすべて軍部が負担する一方、従軍終了後に絵葉書作成用の原画の提供と貸与が慣例として求められていた。そのため、戦前の絵葉書は従軍画家の足跡をたどるのに欠かせない重要なエビデンスとなる。

(2) 各種画集。資料調査の範囲は従軍画家に関連する16種類40冊の画集や資料集に及んでいるが、蘇州関連の図版が発見された画集は以下の6冊である。

資料①『聖戦美術』陸軍美術協会編纂兼発行 1939年

資料②『北支中支従軍画集』大野隆徳著 美術工芸会版 1939年

資料③『靖国之絵巻』陸軍省・海軍省 陸軍美術協会 1940年秋季

資料④『日展史 (13) 新文展編一』日展史編纂委員会 社団法人日展 1984年 (略称『日展史 (13)』)

資料⑤『船の科学館 収蔵資料目録2 (海軍従軍画家作品)』船の科学館 2013年 (略称『船の科学館』)

資料⑥『誕生 130 周年記念 五味清吉展』岩手県立美術館 2016年 (略称『五味清吉展』)

(3) 戦時中に印刷されたポスターなど一枚刷りの図版。分散した図版資料も、蘇州に関する従軍画家の作品であれば本調査の収集対象となる。

2.3 画家と作品のリスト

上記の方法による調査の結果、蘇州を描いた従軍画家は29名、その作品図版は全部で49点発見された。表1はその一覧である。表1の画家名は生年順を第1基準に、没年順を第2基準に配列し、生没年不詳の画家は確定情報の多い順で末尾にまとめる。

表1 画家と作品

No.	画家 (29名)	生没年	中国大陸従軍記録	作品題名 (49点)	図版出典
1	小林万吾	1870~1947	39年中支従軍	①蘇州獅子林	軍事郵便絵葉書
				②林泉	『日展史 (13)』
				③蘇州郊外	軍事郵便絵葉書
				④楓橋	軍事郵便絵入封筒
2	石川寅治	1875~1964	38年北・中支従軍	⑤江南の春 (蘇州)	『聖戦美術』
3	吉田博	1876~1950	38, 40年中支従軍	⑥蘇州	一枚刷り
4	石井柏亭	1882~1958	38年北・中支従軍	⑦江南水郷蘇州	軍事郵便絵葉書
5	南薫造	1883~1950	39年中支従軍	⑧水辺の彩屋	戦前絵葉書
6	大野隆徳	1886~1945	38年北・中支従軍	⑨蘇州留園の秋	『北支中支従軍画集』
				⑩蘇州留園の秋	『北支中支従軍画集』
				⑪蘇州留園の秋	『日展史 (13)』
				⑫蘇州虎丘塔	『北支中支従軍画集』
7	五味清吉	1886~1954	38年中支従軍	⑬蘇州北寺の塔	軍事郵便絵入封筒
				⑭蘇州春の裏町	『日展史 (13)』
				⑮中国風景	『五味清吉展』
8	清水登之	1887~1945	37年中支従軍	⑯蘇州城外	軍事郵便絵葉書
9	熊岡美彦	1889~1944	39年北・中・南支従軍	⑰蘇州獅子林	『聖戦美術』
10	神津港人	1889~1978	38年北支, 39年中支従軍	⑱蘇州城外の景 (雨後)	軍事郵便絵葉書
				⑲蘇州	『船の科学館』
11	佐々貴義雄	1890~1987	38年中支従軍	⑳楓橋警備	『聖戦美術』
12	奥瀬英三	1891~1975	38年南支従軍	㉑蘇州	軍事郵便絵葉書
				㉒蘇州滄浪亭	軍事郵便絵葉書
13	古城江観	1891~1988	40-42年海南島従軍	㉓胡蘇城外	軍事郵便絵葉書
				㉔蘇州にて	軍事郵便絵葉書
				㉕蘇州クリーク	軍事郵便絵葉書

				㊸蘇州クリーク	『船の科学館』
14	中川紀元	1892～1972	37年中支従軍	㊹蘇州風景	『船の科学館』
15	東谷桃園	1893～1976	39年北・中支従軍	㊺蘇州虎丘	『船の科学館』
16	林唯一	1895～1972	38, 40, 42年中・南支従軍	㊻蘇州の橋	戦前絵葉書
				㊼蘇州獅子林園	『靖国之絵巻』
17	江藤純平	1897～1987	38年中支従軍	㊽蘇州	『日展史 (13)』
18	橋本徹郎	1900～1959	38年中支従軍	㊾蘇州	『船の科学館』
19	向井潤吉	1901～1995	37年北支, 38年中支従軍	㊿姑蘇雨情	軍事郵便絵葉書
				㊽影 (蘇州上空にて)	一枚刷り
20	住谷磐根	1902～1997	37年中支従軍	㊾蘇州城	『船の科学館』
21	佐藤一章	1905～1960	不詳	㊿蘇州平和来	『聖戦美術』
22	青山龍水	1905～1998	37年北・中支従軍	㊿水都蘇州	軍事郵便絵葉書
				㊿蘇州所見	軍事郵便絵葉書
23	服部正一郎	1907～1995	38年北支, 40年中支従軍	㊿橋上歩哨 (蘇州)	『聖戦美術』
				㊿蘇州にて	『船の科学館』
24	鈴木貞三	1912～2009	39年中支従軍	㊿蘇州風景	軍事郵便絵葉書
				㊿蘇州寒山寺	軍事郵便絵葉書
25	古島松之助	不詳	37年中支従軍	㊿蘇州寒山寺	軍事郵便絵葉書
				㊿蘇州所見	軍事郵便絵葉書
				㊿蘇州虎邱山の古塔	軍事郵便絵葉書
26	松林義英	不詳	39年中支出征	㊿蘇州風景	軍事郵便絵葉書
27	武内英男	不詳	従軍・時期不詳	㊿蘇州城外横塘的亭子橋	軍事郵便絵葉書
28	小合保一郎	不詳	不詳	㊿蘇州獅子林	『聖戦美術』
29	與條	不詳	不詳	㊿蘇州寒山寺	軍事郵便絵葉書

2.4 画家の属性について

従軍画家の中国大陸派遣は1937～39年の3年間でピークであった。当時の従軍画家の年齢構成について、38年を基準に、派遣された従軍画家たちの生年に基づいて推算すると、表2のようになる。蘇州を描いた従軍画家という限られたデータによる統計ではあるが、当時中国大陸に赴いたのは40代を中心とする中堅の画家たちであった事実が浮かび上がってくる。

表2 1938年頃の画家(29名)の年齢分布

60代(3人)	50代(5人)	40代(9人)	30代(6人)	20代(1人)	不詳(5人)
小林万吾(68歳)	石井柏亭(56歳)	神津港人(49歳)	橋本徹郎(38歳)	鈴木貞三(26歳)	小合保一郎 武内英男 古島松之助 松林義英 與條
石川寅治(63歳)	南薫造(55歳)	熊岡美彦(49歳)	向井潤吉(37歳)		
吉田博(62歳)	大野隆徳(52歳)	佐々貴義雄(48歳)	住谷磐根(36歳)		
	五味清吉(52歳)	古城江観(47歳)	佐藤一章(33歳)		
	清水登之(51歳)	中川紀元(46歳)	服部正一郎(31歳)		

	奥瀬英三 (47 歳) 東谷桃園 (45 歳) 林唯一 (43 歳) 江藤純平 (41 歳)	青山龍水 (33 歳)	
--	---	-------------	--

画家たちの美術関連の出身校を調べると、表3が示すように、東京美術学校（現東京芸術大学）の出身者（卒業生、中退者など）が29名中の14名で、全体の半数近くを占めることが分かる。

表3 美術関連の出身校一覧

画家名	美術関連出身校	卒業・中退等の時期
小林万吾	東京美術学校西洋画科	1898（明治31）年7月卒
石井柏亭	東京美術学校西洋画科	1905（明治38）年中退
南薫造	東京美術学校西洋画科	1907（明治40）年3月卒
大野隆徳	東京美術学校西洋画科	1911（明治44）年3月卒
神津港人	東京美術学校西洋画科	1912（明治45）年3月卒
中川紀元	東京美術学校彫刻科	1912（明治45）年3月中退
熊岡美彦	東京美術学校西洋画科	1913（大正2）年3月卒
五味清吉	東京美術学校西洋画科	1913（大正2）年3月卒
江藤純平	東京美術学校西洋画科	1923（大正12）年3月卒
武内英男	東京美術学校西洋画科	1925（大正14）年3月卒
佐藤一章	東京美術学校西洋画科	1929（昭和4）年3月卒
青山龍水	東京美術学校図画師範科	1929（昭和4）年3月卒
鈴木貞三	東京美術学校西洋画科	1936（昭和11）年3月卒
松林義英	東京美術学校西洋画科	不詳
石川寅治	小山正太郎に学ぶ	1891（明治24）年
吉田博	不同舎に学ぶ	1894（明治27）年
清水登之	渡米フォッコ・タダマ画塾	1907（明治40）年留学
古城江観	福井江亭、山元春挙に学ぶ	1910年代頃（大正初期）
佐々貴義雄	太平洋画会研究所	1906（明治39）年入所
奥瀬英三	太平洋画会研究所	1912（明治45）年入所
林唯一	川端画学校	1916（大正5）年頃在学
住谷磐根	川端画学校	1921（大正12）年頃在学
向井潤吉	京都市立美術工芸学校	1916（大正5）年中退
服部正一郎	日本美術学校洋画科	中退
小合保一郎	不詳	不詳
東谷桃園	不詳	不詳
橋本徹郎	不詳	不詳
古島松之助	不詳	不詳
與條	不詳	不詳

画家の専門について調べたところ、表4が示すように、従軍画家の29名中洋画家が26名で全体の9割を占め、圧倒的に多い実態が見えてくる。

表4 画家の専門分布

洋画家 (26名)	日本画家 (2名)	不詳 (1名)
青山龍水, 石井柏亭, 石川寅治, 江藤純平, 大野隆徳, 奥瀬英三, 神津港人, 熊岡美彦, 小合保一郎, 小林万吾, 五味清吉, 佐々貴義雄, 佐藤一章, 清水登之, 鈴木貞三, 住谷磐根, 武内英男, 中川紀元, 橋本徹郎, 服部正一郎, 林唯一, 古島松之助, 松林義英, 南薫造, 向井潤吉, 吉田博	古城江観, 東谷桃園	與條

2.5 モチーフについて

蘇州が描かれた49枚の作品のモチーフについて、その画面の中心となる題材に基づき大きく「水郷(橋・川・船)」「庭園」「仏塔」「街角」「城壁」「人物」「俯瞰図」の7種類に分けることができる。図版データにおけるモチーフの分布は表5のようになる。従軍画家たちが描いたモチーフの中でもっとも多いのは「水郷」と「庭園」で、この2つの内容は全体の7割近くを占める事実が浮かび、画家たちが蘇州の独特な風景に強く惹きつけられていた一面が見えてくる。

表5 モチーフの分布

画題	水郷	庭園	仏塔	街角	城壁	人物	俯瞰図
図版	③④⑥⑦⑧⑬⑱⑲⑳㉓㉔ ②⑤⑦⑩⑪⑫⑭⑮⑰⑲⑳㉓㉔ ②⑤⑦⑩⑪⑫⑭⑮⑰⑲⑳㉓㉔	①②⑨⑩⑫⑬⑭⑮⑰⑱⑲⑳㉓㉔ ②⑤⑦⑩⑪⑫⑭⑮⑰⑲⑳㉓㉔	⑤⑪⑬⑭⑮⑱⑲⑳㉓㉔	⑮⑳㉓㉔	②⑥⑳	⑳④④	⑳④
数量	22 (44.9%)	12 (24.5%)	6 (12.2%)	4 (8.2%)	2 (4.1%)	2 (4.1%)	1 (2%)
合計	49						

従軍画家たちが描いた戦地記録画は、風景と戦争とのかかわり方に基づき大きく3つのタイプに分けることができる。タイプ1は当時の政治的、軍事的時局が反映されない「純粋な風景」、タイプ2は風景の中に旧日本軍の兵士や日章旗などが点景として描かれた「時局風景」、タイプ3は戦争の場面が描かれた「戦闘風景」である。従軍画家が描いた蘇州関連作品のタイプ別分布について表6のようにまとめることができる。

表6 風景と戦争とのかかわり

タイプ	タイプ1 純粋な風景	タイプ2 時局風景	タイプ3 戦闘風景
図版	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑰⑱⑲⑳㉓㉔ ②⑤⑦⑩⑪⑫⑭⑮⑰⑲⑳㉓㉔	⑬⑭⑮⑰⑱⑲⑳㉓㉔ ②⑤⑦⑩⑪⑫⑭⑮⑰⑲⑳㉓㉔	
数量	36 (73.5%)	13 (26.5%)	0
合計	49		

表6を見ると、従軍画家たちが描いた蘇州関連の作品の中で、タイプ1の純粋な風景画の作品は全体の7割強、タイプ2の時局が反映された風景画は3割弱を占め、タイプ3の戦闘風景の作品は発見されていないことが分かる。従軍画家が描いた蘇州の作品に現れるこのような実態は一体何を意味するものか。実際画家たちが訪れた地域が戦場から離れた場所だったためなのか、それとも戦闘や戦跡が近くにあっても、画家たちの視線はそれを避け風景を追いかけていたためなのだろうか。この現象について、蘇州は他の地域(上海、南京、武漢など)に比べ相対的に激戦区ではなかったことが関係する可能性もあるが、われわれは特定の地域を超えて画家たちの従軍体験談の中から、さまざまな要因の可能性を探

ってみたいと思う。

中川紀元は、その随筆集『世路のシミ』（1941）の一節「従軍談義」の中で、戦闘中の取材経験について次のように回顧している。

「陸海軍の当局では、従軍画家の活動に相当な期待をかけて、色々の便宜を計ってくれたり、近いうちに海軍では従軍画家のスケッチ展覧会まで開催してくれることになっているのだが、自分一個の無能無為を歎ずるばかりでなく、全般的に戦争を表現すべく、画家の持つ技術と方法の如何に無力なものであるかを痛感して帰ったに過ぎないのは残念でもあり且つ申し訳ない次第だ。

正直のところ、戦線へ出かけて、激しい撃ち合いの場所に身を置いた時には、これは絵どころの話ではないと思った。この激しさ、遅しさ、物凄さを絵などで何うしようというのだ、とスッカリ尻込みしてしまった」(p 101)

この記述から、戦闘の真っ只中にいながら絵筆を動かさずに途方に暮れた一人の従軍画家の姿が目には浮かぶ。一方、戦跡に赴いた住谷磐根は1938年3月16日に群馬県の地方紙「上毛新聞」に寄せた『続江南画信』の一節「敵死体の傍でスケッチ」において次のような記述がある。

「北極閣、鶏鳴寺等がある、遊覧地区ではあるが、林の中の鉄道踏み切りの付近には、敵遺棄死体があちらこちらにごろごろしている。◇……私は写生の道具を広げて、北極閣や紫金山を写生した。二時間である。北極閣も鶏鳴寺も見物の価値あるところとして、南京の名所であるが、見物できなかった。僅かに玄武門から玄武湖の清澄な水に紫金山を眺めて、五州公園の游船の昔日を想像して帰路に就く」(東中野 2013 p 175)

従軍画家が戦跡の中で凄惨な光景をよけながら風景を探しスケッチしていた様子をリアルに記録している。そして、永瀬義郎は自伝『放浪貴族』（1977）の一節「中国大陸に行く」において次のように従軍の経緯を綴っている。

「陸軍に素描や淡彩画を描くようにと頼まれた。僕は戦争の絵は描かない、描きたくないと言うと、いや描かなくてもよろしい、先生には中国の美しい風景を描いてほしいと言うので、田園風景なら描きましょうと返事をした。これは絵葉書を作って日本の兵隊に慰問品として配るらしいんだ。兵隊は戦争の絵など見たくもないだろうしね。そしてそれを日本にいる両親に、自分の安否を知らせるのに使ったようだ」(p 214)。

従軍画家の中には、確かに軍部に直接依頼され戦闘画制作という明確な目的で中国大陸に従軍した画家（例えば藤田嗣治や宮本三郎など）がいたのは事実だが、軍部の依頼をさまざまな理由で拒んだ人も多い中⁽¹⁾、永瀬のように、つまり「戦争の絵は描きたくない」「田園風景なら描きましょう」というスタンスで大陸に赴いた画家も少なくなかったようだ。

われわれは中川、住谷や永瀬の回想から従軍画家たちが戦場や戦跡にしながら風景画を多く描いた現象についてある程度想像することができよう。そして、永瀬の回想に示された、家族に安否を知らせる慰問品という軍事郵便絵葉書の用途の説明も、表6のような、純粋な風景画が多く描かれた背景を理解する重要なヒントとなるだろう。

3. 図版データの記録

以下表1の順位に基づき、一人ひとりの画家の従軍情報の整理と、発見された作品図版の記録を行う。

3.1 小林万吾（こばやしまんご 1870～1947）

小林は1939年に東京美術学校の教授在職中に陸軍の従軍画家として華中と華東地域に赴いた。南薫造の『従軍日記』（藤崎 2005 p 17）によれば、小林は、南薫造、鈴木貞三とともに1939年3月31日に

広島宇品港から出港し4月3日に上海に到着した後、江蘇省の蘇州、浙江省の杭州、江西省の九江などへと移動していた。小林は途中体調不良により予定を3日繰り上げ5月13日にさきに帰国したけれども、彼の行動は南の日記の中で断片的に記録されている。同年4月8日の日記には一行が蘇州の獅子林園を訪れスケッチした事実が記されている。

「町には朝市が立って居て非常な雑沓である。其の間を抜け狭い露路の様な通りを漸やく人力車が通り抜けつゝ、獅子園に行く。……牡丹はまだ赤い新芽であったが此の竹垣を透して見る盛の頃は定めし美しいものであらう。寫真を撮った里、スケッチしたりして一時間位居て出る。再遊寫生の機が望ましい」(藤崎 2005 p 25) (下線は彭による。以下同。)

軍事郵便絵葉書の中で小林が描いた作品図版①「蘇州獅子林」が発見されている。それは一行の獅子林での写生活動にかかわる1枚ではないかと思われる。小林は1939年の第3回新文展に「林泉」(915×1168 mm 1939年作 香川県立ミュージアム所蔵)という作品②を出品していた。①と②は同じモチーフでありながら、点景人物の姿勢や筆遣いなど細部において多くの相違点が見られる。①の原画サイズは不明だが、小林は当時同じモチーフを絵葉書制作用と画展出品用という用途別に複数枚描いたと見られる。

①「蘇州獅子林」(小林万吾)



②「林泉」(小林万吾)

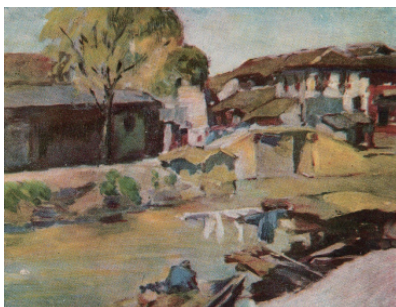


南薫造は4月8日の日記で蘇州の町並みや一行の写生活動について、次のように綴っている。

「河に沿ふ人家が甚だ引付けた。楊柳は出たばかりの新芽をポーッとさせて居る。小林氏、松林君、鈴木君は油絵、私と雨田君は水彩を画いた」⁽²⁾(藤崎 2005 p 26)

小林の2枚目の軍事郵便絵葉書の図版③「蘇州郊外」には、日記の記述と同じ場所なのかは特定できないが、南が言う「河に沿ふ人家」の風景が描かれている。小林の3枚目の図版で絵入封筒に印刷された④「楓橋」は、南の日記では触れられていないが、小林が蘇州滞在中に描いたと見られる水郷風景である。

③「蘇州郊外」(小林万吾)



④「楓橋」(小林万吾)



3.2 石川寅治（いしかわとらじ 1875～1964）

石川は1938年に陸軍に従軍し中国の華北、華中と華東地域を訪れていた（飯野 2005 116号 p17）。石川が描いた従軍関連の作品図版は8枚発見されているが、その中で蘇州風景がモチーフとなったのは『聖戦美術』（1939）に掲載されたモノクロ図版⑤「江南の春（蘇州）」のみである。石川は、1930年の第11回帝展にも「蘇州の春」（参照図①）を出品していたので、従軍画家として活動する前にも蘇州を訪れ風景を描いていたことが分かる。彭（2013b p1）では瀬野覚蔵が従軍画家になる以前にも中国風景に関する画集を出版したことに触れたが、石川や瀬野のように、日中戦争の前から大陸風景に興味を示し写生旅行で中国を訪れた画家も少なくなかったようである。日中戦争以前の画家たちの創作活動を含めて考えれば、彼らの従軍について、当時のことは「彩管報国」だけではすべてを語れず、画家たちは物資が著しく不足する中創作活動を続けるために画材の配給を受け公費で写生旅行をする機会として従軍を活用していた一面が見える。

⑤「江南の春（蘇州）」（石川寅治）



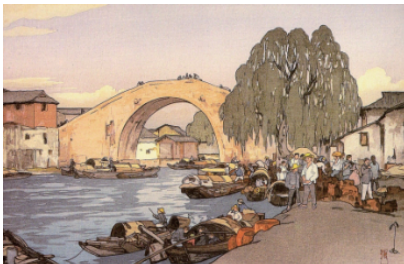
参考図①「蘇州の春」（石川寅治）



3.3 吉田博（よしだひろし 1876～1950）

飯野（2005 116号 p17）では1938（昭和13）年「9月5日 吉田博、佐々貴義雄、陸軍嘱託画家として渡支」「陸軍嘱託従軍画家：（中支方面）五味清吉、三橋武顕、藤島武二、石井光楓、吉田博、佐々貴義雄、大野隆徳、瀬野覚蔵、鳥海青児」と記録され、安永（2009 p175）がまとめた吉田博略歴では「（1940年）この年も、前年、前々年に引き続いて陸軍嘱託従軍画家として中国に派遣される」と記されている。これらの記録から、吉田は1938～40年の間に度々従軍画家として中国に渡っていたことが明らかである。軍事郵便絵葉書の中で吉田が従軍した時に描いた華中、華南の風景画図版は15枚発見されているが、蘇州風景はその中の1枚で、当時発行の版画図版⑥「蘇州」である。図版わきの添え書きには「自摺 昭和拾五年 蘇州」と記されている。文献調査では吉田が蘇州を訪れた時期と経緯は不明だが、⑥の図版により彼は1940年までの数回の大陸従軍の中で少なくとも1回蘇州を写生旅行で訪れていたことが分かる。

⑥「蘇州」（吉田博）



⑦「江南水郷（蘇州）」（石井柏亭）



3.4 石井柏亭（いしいはくてい 1882～1958）

石井が生前まとめた『柏亭自伝』（1971 p 400）の年譜では1938年頃の従軍について、「八月、陸軍省恤兵部の嘱を受け。裕伊之助と北支、蒙疆に赴き、張家口、北京に作画。十月、海軍の嘱を受け上海に赴き、「軍艦出雲」と「上海油公司之戦闘」の二作の下図を作り^③、次いでその大作に着手。はじめて蘇州を見る」と記されている。日展史編纂委員会（1984a p 700～701）の1938年新文展年表では7月28日に「石井柏亭、裕伊之助 陸軍嘱託画家として渡支」、9月4日に「石井柏亭、裕伊之助 北支より帰国」、そして10月22日「石井柏亭 上海より帰国」とそれぞれ記載されている。

石井が描いた軍事郵便絵葉書は全部で10枚発見され、描かれた地域は北京市（朝陽城外）、河北省（張家口）、山西省（大同）、山東省（中海公園）、蒙疆、上海市（龍華）、江蘇省（蘇州）に及んでいるが、蘇州関連の作品図版はその内の1枚^⑦「江南水郷（蘇州）」である。彼が「はじめて蘇州を見る」という従軍活動に関連するものと見られる。

3.5 南薫造（みなみくんぞう 1883～1950）

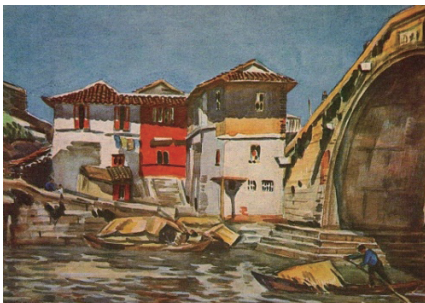
南薫造の『従軍日記』によれば、彼は1939年4月3日～5月16日の間に小林万吾、鈴木貞三とともに「中支」（華東、華中）に従軍していた。4月8日、9日の日記には、蘇州での写生活動について次のように書かれている。

「八日。晴。暖 六時半起床。……起き出て宿の左の狭い町を通過して河ふちの町に出る。……左に曲って行くと古い石橋がある。地図の上で見ると上津橋とあるのに相当するものらしい。橋の積石の間から灌木が生へて居た里、かづらが垂れて居たりする。欄かんの一部も壊れて居る。多分多くの画家に画かれた橋であらうと想はる。橋の前後から、また両岸から眺めたが中々好い。明日は之れを画き度いと思ふ。……橋の南の側の岸辺でハツ切の水彩を二枚画いた。河に沿ふ人家が甚だ引付けた。楊柳は出たばかりの新芽をポーッとさせて居る。小林氏、松林君、鈴木君は油絵、私と雨田君は水彩を画いた」（藤崎 2005 p 24～26）

「四月九日。曇。和。……小生は昨日見て置いた橋を画く準備をする。松林君も此橋を何處からか画くと云ふ。」（藤崎 2005 p 26）

南が描いた従軍関連の風景画図版は21枚見付き、分布地域は上海市、江蘇省（南京、蘇州）、浙江省（杭州）、江西省（九江）に及んでいる。蘇州が描かれた風景画図版は1枚発見されている。1939年の第3回新文展の出品作図版として戦前絵葉書に印刷された^⑧「水辺の彩屋」である。8日または9日の日記で触れた橋の写生にかかわる1枚と考えられる。広島県立美術館には同名の水彩画「水辺の彩屋」（242×326mm、1939年作）が所蔵されている。筆者は同美術館の公開画像で確認したところ、両者にはほぼまったく同じモチーフが描かれているが、詳細な部分を見ると、美術館のものは^⑧の原画ではないことが明らかになった。^⑧の出品作は現地での水彩スケッチ（美術館の所蔵作品）に基づいて制

⑧ 「水辺の彩屋」（南薫造）



⑨ 「蘇州留園の秋」（大野隆徳）



作されたものと見られる。⑧にも美術館所蔵作品にも「蘇州」とは明記されていないが、表記された制作年が従軍の時期と重なることや風景の特徴、特に吉田博の従軍作品⑥と比較すると、対岸の2階建ての家屋やその窓の位置、橋の形態などからして、吉田の⑥と南の⑧の両者は同じ橋をやや異なる角度から描いたものだと考えられ、⑧は蘇州の風景であると推定できる。

3.6 大野隆徳（おおのたかのり 1886～1945）

大野は『北支中支従軍画集』（1939）の中で1938年2月に「北支」（華北）、9月に「中支」（華中・華東）に従軍していたことを記している。画集や絵葉書の中で大野による北京市、山東省（済南）、湖北省（漢口、光州⁴⁾、江蘇省（南京、蘇州）などの風景画図版は49枚発見されている。蘇州風景に関連するカラーの作品図版⑨「蘇州留園の秋」、モノクロの作品図版⑩「蘇州留園の秋」と⑪「蘇州虎丘塔」は同画集に収録されたものである。日展史編纂委員会（1984a）には大野が1939年の第3回新文展に出品した「蘇州留園の秋」のモノクロ図版⑫が掲載されている。⑫のモチーフは、基本的に⑨と同じものだが、そこには点景の人物や右側の渡り廊下が描き加えられていることが確認できる。

⑩「蘇州留園の秋」（大野隆徳）



⑪「蘇州虎丘塔」（大野隆徳）



⑫「蘇州留園の秋」（大野隆徳）



3.7 五味清吉（ごみきよきち 1886～1954）

佐々木（1986 p 160）では、五味は「昭和11年（1936）の4月から6月にかけて、朝鮮、南満州を旅行した。……昭和13年（1938）と昭和14年（1939）には従軍画家として中国を訪れたようである。……最後の中国旅行は昭和16年（1941）であった」と記されている。飯野（2005 116号 p 19）によれば、五味は1938年に陸軍に従軍し「中支」（華中、華東）に赴いた。加藤（2016 p 82）では盛岡市先人記念館の研究結果に基づき五味の年譜において次のようにまとめられた。五味は1936年4月25日に「朝鮮に渡り、2ヶ月滞在。……その後中国を旅行。大連、奉天、承德を訪問」、37年3月に「中国、天津方面を旅行」、38年3月に「中国従軍画家として上海、南京、蕪湖、杭州を視察」、39年4月14日「陸軍美術協会結成。発起人に加わる。中国従軍画家として渡る」、40年「10月29日から約1ヶ月半、天津旅行」をしていた。これらの記録から、五味は日中戦争勃発前後の1936年と40年の間に取材旅行と従軍を含めて少なくとも5回に渡って中国を訪れたことが分かる。

五味がその時期に描いた作品図版はこれまで20枚発見され、その作品画題に含まれた地域名は華北の北京市（宛平県城）、天津市、河北省（張家口）、華東の上海市、江蘇省（南京、蘇州、無錫）、浙江省（杭州）、安徽省（蕪湖）に及んでいる。その中で蘇州にかかわる作品図版は3枚確認されている。その1枚は⑬「蘇州北寺の塔」、軍事郵便の絵入封筒に印刷された図版で、作品右下の落款には「昭和十三年三月於蘇州 五味生写」と記されているので、文献で記載された彼の1938（昭和13）年頃の従軍活動にかかわる作品図版であることは間違いない。日展史編纂委員会（1984a）には五味が1938年の第2回新文展に出品した作品のモノクロ図版⑭「蘇州春の裏町」が掲載され、その落款の日付は「昭和

十二年」か「昭和十三年」と見られる。昭和十二年の「中支」地域の従軍記録がないので、「昭和十三年」だとすると、⑭も⑬と同じ時期に北寺塔付近の裏町を描いた風景である可能性が高くなる。3枚目の図版は2016年12月～17年2月開催の「生誕130周年記念五味清吉展」に展示された「中国風景」と題する油彩画（455×379mm 個人蔵）である。その推定創作年について「1923～1941」と幅広く表示されているが、その絵画の内容を見ると1938年出品の⑭の図柄とほぼ一致している。⑮では遠景の仏塔がなく、左端の落款の部分もないことが観察される。⑭と⑮の関係は、もともと同一の作品であったがその後何らかの事情で部分的剥脱、欠損があったため修正、修復が行われたのか、それとも最初から五味が2種類の似たような構図の絵を描き仏塔のある1枚を画展に出品したのか、その真相を突き止めるにはさらなる調査が必要である。

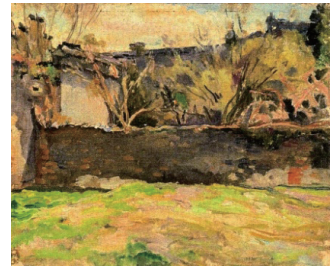
⑬「蘇州北寺の塔」（五味清吉）



⑭「蘇州春の裏町」（五味清吉）



⑮「中国風景」（五味清吉）

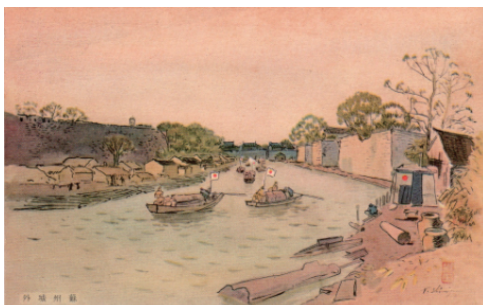


3.8 清水登之（しみずとし 1887～1945）

杉村（1996 p 146～148）による清水の年譜では、日中戦争が始ってからの清水の華東地区従軍について4回触れている。1937年10月～38年1月「上海、南京等を取材」、1938年10月～39年2月「漢口攻略に従軍すべく出発。10日に福岡より飛行機に乗り、上海大場鎮の飛行場着」、1943年6～9月「南京、上海に滞在」、1944年8月～11月「上海、南京に滞在」。

筆者所収の清水従軍関連の作品図版は18枚で、確認された地域には江西省、山西省、江蘇省（南京、蘇州）、上海市などが含まれる。その中で蘇州風景が描かれたのは⑯の「蘇州城外」のみである。⑯は兵隊が船で移動する様子が点景として描かれたタイプ2の時局風景である。杉村による清水年譜では蘇州についての言及はなかったが、清水は上海を訪れた4回の従軍過程において少なくとも1回は蘇州に立ち寄ったのではないかと推測される。

⑯「蘇州城外」（清水登之）



⑰「蘇州獅子林」（熊岡美彦）



3.9 熊岡美彦（くまおかみひこ 1889～1944）

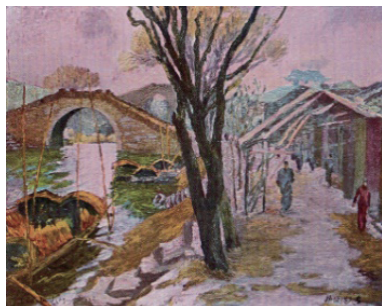
熊岡の従軍歴について、飯野（2005 p 13）では1937年11月に「水戸連隊へ応召入隊」と記され、東京文化財研究所のHPデータでは1939年に「北，中，南支従軍」，「海軍省及び陸軍省の囑託として南支方面に従軍，二月一日出発した」，日展史編纂委員会（1984b p 585）の新文展年表では1940年2月5日に「陸軍省南支派遣軍の招聘で渡支」（3月21日まで）とそれぞれ記されている。熊岡が「中支」の華東地区に従軍したことに関連する作品図版は3枚（南京風景2枚と蘇州風景1枚）発見されている。蘇州風景は『聖戦美術』掲載のモノクロ図版¹⁷「蘇州獅子林」である。

3.10 神津港人（こうずこうじん 1889～1978）

飯野（2005 116号 p 19, 20, 118号 p 24）によれば，神津は1938年に陸軍従軍で「北支」（華北）へ，39，41年に2度に渡り海軍従軍で「中支」（華中，華東）へ赴いていた。佐久市立近代美術館（1997）の略年表では神津は1938（昭和13）年に「海軍の従軍画家として中国北部を旅行」，1941（昭和16）年に「海軍の従軍画家として中国中部を旅行」と記され，五十殿（2010 p 789）では『旬刊美術新報1.4』を引用し，神津が1941年7月「満洲国新京へ急行，同国参議丁鑑修氏の肖像を揮毫，承德（熱河省首都）に旅し直路七月末帰京」と記されている。

神津の従軍関連の作品図版は全部で8枚発見されているが，蘇州を描いたものは¹⁸「蘇州城外の景（雨後）」と¹⁹「蘇州」（730×907mm，船の科学館所蔵）の2枚である。長野県信濃美術館（1985）の神津港人略年譜によれば，1941年9月の第二回聖戦美術展に「蘇州城外の景（雨後）」を出品したと記されている。¹⁸には水郷の石橋，クリークに浮かぶ小船，河辺の小路と道行く人，遠景の城壁と楼閣の屋根，¹⁹にはクリークと船着き場に停泊中の船などがそれぞれ色彩豊かに描かれている。神津の従軍関連作品には，外に油彩作品として山西の「大同」（1938）と南京の「鶏鳴寺」（1938）（佐久市立近代美術館1997），モノクロ図版として「天津白河の景」（『聖戦美術』1939）が確認されている。

¹⁸「蘇州城外の景（蘇州）」（神津港人）



¹⁹「蘇州」（神津港人）



²⁰「楓橋警備」
（佐々貴義雄）



3.11 佐々貴義雄（ささきよしお 1890～1987）

飯野（2005 116号 p 17, 117号 p 33）では，佐々貴は従軍画家として吉田博とともに1938年9月に華中，華東地区に，1940年2月頃にも華中の岳州に赴いたと記されている。佐々貴の従軍作品図版は全部で7枚発見されているが，その地域は安徽省（安慶），江西省（九江，南昌），湖北省（武昌），江蘇省（蘇州）に及んでいる。蘇州に関連する作品は『聖戦美術』（1939）に掲載されたモノクロ図版²⁰「楓橋警備」の1枚である。前景には銃を構える兵士の姿が，背景には中州のある水郷風景や遠方の仏塔がそれぞれ描かれている。

3.12 奥瀬英三（おくせえいぞう 1891～1975）

奥瀬の従軍活動について、飯野（2005 116号 p18）では1938年10月に鶴田吾郎、三上知治とともに「従軍画家として揚子江沿岸を廻る」と記され、東京文化財研究所HPのデータでは同年奥瀬が「海軍従軍画家として中国の漢口方面に従軍」と記されている。奥瀬の従軍関連の作品図版は全部で19枚発見されている。その中で地域が特定できるのは華東の江蘇省（蘇州）、安徽省（安慶）と華中の湖北省（漢口）、湖南省（岳陽）で、蘇州関連の作品図版は⑳「蘇州」と㉑「蘇州滄浪亭」の2枚である。奥瀬の蘇州従軍は文献記録としては確認されていないが、この2枚の図版は彼が揚子江沿岸を廻る際に蘇州にも立ち寄ったことを示すものとなる。

㉑「蘇州」（奥瀬英三）



㉒「蘇州滄浪亭」（奥瀬英三）



3.13 古城江観（こじょうこうかん 1891～1988）

古城は戦争画「紐育制圧図」を描いた画家として知られている。飯野（2005 119号 p6, 8）によると、彼は1940～42年頃中国海南島、東南アジアに従軍していた。古城の東南アジア従軍体験は彼の従軍記『南を描く』（1943）に記されている。筆者所収の古城の従軍関連作品図版は全部で18枚で、その中には江蘇省（南京、蘇州、揚州）と海南島の風景が含まれている。㉓「蘇州にて」、㉔「蘇州クリーク」、㉕「蘇州クリーク」（455×680mm 船の科学館所蔵）と㉖「胡蘇城外」はその中の蘇州関連墨彩画の4枚である。彼の蘇州地域の従軍について文献記録では確認されていないが、古城の従軍活動地域に蘇州が含まれていたことをこれらの図版が示している。㉓㉔㉕は船上に点在する日章旗と兵隊の姿が描かれたタイプ2の時局風景である。㉔と㉕は同じモチーフを2枚描いたものと見られる。㉖は蘇州の城壁と堀に浮かぶ小船が描かれたタイプ1の純粋な風景である。

従軍画家として中国大陸に派遣された日本画家には、堂本印象、川端龍子、伊東深水、小早川秋声、福与悦夫、不二木阿古などが含まれていたが、表4で示したように、蘇州を描いた従軍画家の中で日本画を専門とする者は古城江観と東谷桃園だけである。

㉓「蘇州にて」（古城江観）



㉔「蘇州クリーク」（古城江観）



㉕「蘇州クレーク」(古城江観)



㉖「胡蘇城外」(古城江観)



3.14 中川紀元 (なかかわきげん 1892~1972)

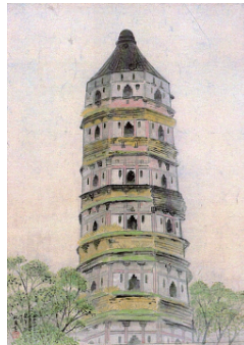
中川の従軍について、飯野 (2005 116号 p13) では1937年11月初旬「従軍画家として上海に出かけた」、11月上旬から下旬にかけて「海軍従軍画家として上海、南京方面へ」、12月に「従軍画家として上海戦線に赴く」、12月27日に「南京戦線より帰還」とそれぞれ記されている。中川は彼の随筆集『世路のシミ』(1941 p 81)において蘇州での写生活動について触れたが、時期や具体的な場所についての明記はなかった。

中川による蘇州関連の作品図版は1枚発見され、それは水郷風景が描かれた㉗「蘇州風景」(378×475 mm, 1941年作, 船の科学館所蔵)である。㉗は中川が37年の従軍取材に基づいたものなのか、それとも41年頃に再度の従軍の時に描いたものなのかは不明である。

㉗「蘇州風景」(中川紀元)



㉘「蘇州虎丘」(東谷桃園)



3.15 東谷桃園 (ひがしたにとうえん 1893~1976)

飯野 (2005 116号 p21) では1939(昭和14)年「3月26日東谷桃園、従軍画家として出発。〈中北支蒙疆満鮮に亘り二ヶ月半の従軍写生旅行〉より6月10日帰還」と記されている。東谷の蘇州関連作品図版は1枚発見されている。船の科学館に所蔵された㉘「蘇州虎丘」(793×578 mm, 1939年作)である。作品左下の落款には「昭和十四年五月」と記されているので、その情報から東谷は1939年の3月頃朝鮮半島から中国東北部に移動し、その後南下し5月頃に華東地域の蘇州に辿りついたと推定することができる。

3.16 林唯一 (はやしただいち 1895~1972)

林唯一は、大正から昭和初期にかけて、雑誌の挿絵作家として活躍していた。飯野 (2005 116号

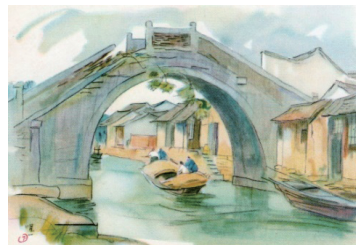
p 18) によれば、林は1938年に「中支」(華中、華東)に従軍していた。弥生美術館(1993 p 2)の林唯一年譜では「昭和15年(1940)46歳 中支に従軍」と記されている。1942(昭和17)年に、彼は海軍従軍画家として南太平洋のラバウルに派遣されていたが、太平洋戦争の従軍体験については彼の手記『爆下に描く』(1943)の中で詳しく記録されている。

林の大陸従軍関連の作品図版は全部で11枚発見され、描かれた地域は華東の江西省(衡陽, 星子城, 廬山), 江蘇省(蘇州), 華南の広西省(南寧), 広東省(粵東)に及んでいるが、蘇州風景の図版は2枚発見され、1枚目の㉙「蘇州獅子林園」は1940年秋季刊行の『靖国之絵巻』に掲載されたもので、2枚目の㉚「蘇州の橋」は正確な刊行年は特定できないが、戦前絵葉書に印刷されたものである。2枚とも林の1938年または1940年頃の「中支」従軍に関連する図版と推定される。

㉙「蘇州獅子林園」(林唯一)



㉚「蘇州の橋」(林唯一)



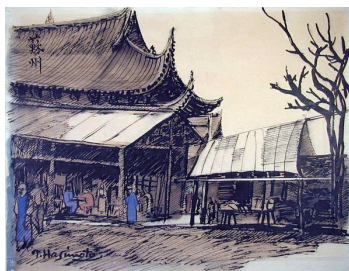
3.17 江藤純平(えとうじゅんぺい 1898~1972)

江藤は、1938年5月8日に中村研一, 向井潤吉, 小磯良平などとともに陸軍報道班のメンバーとして上海方面に赴き、1939年7月には他の9名の嘱託従軍画家とともに陸軍美術協会, 朝日新聞社主催の第1回聖戦美術展(6日~23日)の出品画家リストに名を連ねていた(飯野2005 116号 p 15, 22)。江藤がいつ頃蘇州を訪れたかについて詳細な情報は不明である。江藤が描いた従軍関連の作品図版は全部で5枚発見されているが、画題に反映された地域には、上海市, 浙江省(金華), 江蘇省(蘇州)が含まれる。その中で蘇州にかかわる作品は㉛「蘇州風景」の1枚で、1938年第2回新文展の出品作のモノクロ図版として残っている。

㉛「蘇州風景」(江藤純平)



㉜「蘇州」(橋本徹郎)



3.18 橋本徹郎(はしもとてつろう 1900~1959)

船の科学館(2013 p 69)には「橋本徹」と表記された従軍画家の作品図版「蘇州」が掲載されている。筆者はそのサインの筆跡「T. Hasimoto」を『聖戦美術』中の「橋本徹郎」の作品図版の筆跡と照合した結果、それが「橋本徹郎」の作品であることが判明した。橋本徹郎のプロフィール情報は不明で

あるが、飯野（2005 116号 p 19, 20）によれば、彼は1938年の「中支方面」の海軍従軍画家として名を連ね、同年秋頃に高井貞二などととも「武漢攻略戦に従軍」していた。橋本の従軍に関連する作品は全部で5枚発見され、その作品の地域には湖北省（漢口、黄陂口）と江蘇省（蘇州）が含まれ、蘇州に関する作品は船の科学館所蔵の水彩画③「蘇州」（293×380 mm）である。

3.19 向井潤吉（むかいじゅんきち 1901～1995）

向井は戦後古民家を描く風景画家としてよく知られるが、戦前長く戦争画家、従軍画家として活躍していた。飯野（2005 116号 p 13, 15, 16, 117号 p 7, 119号 p 12）によれば、彼は1937年には華北、38年には華中、華東、41～42年にはフィリピン、44年にはビルマ（現ミャンマー）などに従軍していた。1937年頃に従軍は彼の従軍手記『北支風土記』（1939）に詳しく記されている。1938年の従軍について、日展史編纂委員会（1984a p 699）の「新文展年表」では6月27日に「向井潤吉、小磯良平、柏原覚太郎 上海から帰国」、橋本（2010 p 155）の「向井潤吉略年譜」では1938年5月「中村研一、小磯良平、朝井閑右衛門、脇田和、柏原覚太郎、江藤純平、南政善と上海に赴き、上海軍報道部の委嘱により記録画を制作する」とそれぞれ記されている。

向井の従軍関連の戦闘画図版は18枚、風景画図版は20枚発見されているが、風景画図版の中には、蘇州風景として絵葉書図版③「姑蘇雨情」と一枚刷りの図版④「影（蘇州上空にて）」⁽⁵⁾の2枚が含まれている。③は墨彩による水郷風景、④は油彩による町の俯瞰図である。④には、町を覆う飛行機の巨大な影が描かれているが、それが単なる写実的な描写というより当時の戦争に対するある種の主張、メッセージが含意された作品のように思われる。当時の軍部が鼓舞する「戦意高揚」の宣伝効果をねらった作品と見るか、それとも平和な古都に不穏な戦争の影が忍び寄るという「厭戦」寓意が込められた作品と見るかは、鑑賞者の視点によって異なってくる。

③「姑蘇雨情」（向井潤吉）



④「影（蘇州上空にて）」（向井潤吉）



3.20 住谷磐根（すみやいわね 1902～1997）

飯野（2005 116号 p 13）によれば、住谷は1937年11月中旬から下旬にかけて海軍従軍画家として上海、南京方面に赴いた。住谷が戦時中群馬県の地方紙「上毛新聞」に寄稿した「江南画信」「続江南画信」（手島2008, 東中野2013）によれば、彼は1937年11月12日後に上海に入り、12月12日に軍艦に便乗し上海から揚子江に遡り水路で江蘇省の江陰、鎮江、南京へと移動していた。画信では上海から南京に行く往路での写生取材の体験を詳しく記している。東中野（2013 p 146）では、住谷は1938年1月3日に上海に戻ったと記されているが、画信の中では蘇州に関する内容や上海に戻った帰路の話は綴られていない。

住谷の蘇州関連の作品図版は1枚発見されている。それは船の科学館所蔵の⑤「蘇州城」（320×

400 mm)である。住谷の大陸従軍は飯野(2005)、手島(2008)と東中野(2013)で記された1937年末頃の1回のみだったかはまだ確定できていないが、もしそうだとしたら、彼は南京から上海へ戻る帰路で蘇州に立ち寄ったか、または従軍期間中のいつか上海から蘇州を訪れた可能性があり、㉓もその頃に描いた作品の可能性が高くなる。

古城江観が描いた㉔「胡蘇城外」は城壁の外側の正面から見た風景だが、㉓は住谷が同じ城壁をその側面から描いたものになる。

㉓「蘇州城」(住谷磐根)



㉔「蘇州平和来」(佐藤一章)



3.21 佐藤一章(さとうかずあき 1905~1960)

佐藤一章の名は1929(昭和4)年東京美術学校西洋画科の卒業生名簿に載っている。佐藤の従軍に関する記録は文献では見つかっていないが、『聖戦美術』(1939)には佐藤が描いた作品図版㉔「蘇州平和来」が発見されている。それには蘇州街角の露店風景と子供の姿が描かれている。『聖戦美術』に掲載された中国関連作品がほとんど従軍画家の現場写生に基づいたものであったことから、㉔も佐藤が1937~39年の間に蘇州を訪れた時の従軍体験に基づく作品であった可能性が高いと推定される。

3.22 青山龍水(あおやまりゅうすい 1905~1998)

飯野(2005 116号p14)では、青山は1937年11月下旬に「陸軍従軍画家として北・中支へ」と記されている。宝木(1992p9)は青山がかつて書いた従軍当時の回想文の一節を次のように引用している。

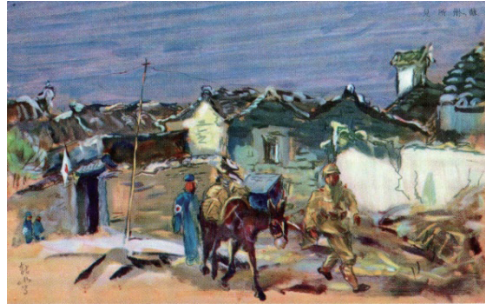
「30歳代の若さのもつ情熱で、戦争がはじまると、戦場というものが見たくなかった。私は予備役の軍曹だったけれども、まだ私には召集令状が来なかった事象のはじめだったので、当時の陸軍省から囑託の画家として大陸に行ってくれといわれて、よろこんで上海から南京、漢口への戦場の道を軍と一緒に歩き、それから北支、北京を振りだしに山西、太原へのコースをまわってきたときは、昭和16年になっていた。」

これらの情報から、青山は1937~41年の間に中国の華東、華中と華北地区に従軍していたことが分かる。具体的な従軍ルートと到着地点は不明だが、青山の戦地記録画図版は23枚発見され、図版の風景内容は蒙古、上海、江蘇省(蘇州、南京)、江西省(九江)に及んでいるが、その中で蘇州風景は2枚、㉕の「水都蘇州」と㉖の「蘇州所見」が発見されている。2枚ともタイプ2の時局風景で、㉕は船に乗る兵士の姿が点景として描かれた水郷風景、㉖は戦時中の蘇州の街角で見た兵士とロバの物資運搬の一場面を記録したものである。図1における蘇州の地理的位置で分かるように、これらの図版の存在は彼が上海から南京へ向けて移動した際の往路(または南京から上海にもどる帰路)で蘇州を訪れたことを示すものとなる。

③⑦「水都蘇州」(青山龍水)



③⑧「蘇州所見」(青山龍水)



3.23 服部正一郎 (はっとりしょういちろう 1907~1995)

服部の従軍記録について、真部(1985 p165)では1938年「従軍画家として、支那方面の艦隊に乗組む。が、三か月で病の為に帰国する」、飯野(2005 116号 p17)では1938年7月20日に海軍省嘱託従軍画家として「北支方面」に出発したとそれぞれ記されているが、彼の華東地区の従軍についての記録は不明である。服部が描いた従軍関連の作品図版は4枚発見されているが、作品の題名には中国の地域名として華北の山西省(大同)の外に、華東の上海市、江蘇省(蘇州)が含まれている。蘇州風景は『聖戦美術』(1939)に掲載されたモノクロ図版③⑨「橋上歩哨(蘇州)」と船の科学館所蔵の④⑩「蘇州にて」(213×272mm, 水彩)の2枚である。③⑨は歩哨と日章旗が描かれた戦時下の蘇州の町中の時局風景を記録したものである。真部(1985 p165)では「第二六回二科展に「難行」,「橋上歩哨」を出品する」と記されている。

③⑨「橋上歩哨(蘇州)」(服部正一郎)



④⑩「蘇州にて」(服部正一郎)



3.24 鈴木貞三 (すずきていぞう 1912~2009)

鈴木は1939年の従軍当時27歳で、表2が示すように、蘇州を訪れた従軍画家の中でもっとも若いメンバーであった。南薫造の日記によれば、鈴木は当時小林万吾の助手として同行していた。一行が蘇州に着いた後の4月8日の日記には次のようなことが記録されている。

「八日。晴。暖 六時半起床。……起き出で宿の左の狭い町を通過して河ふちの町に出る。……左に曲って行くと古い石橋がある。地図の上で見ると上津橋とあるのに相当するものらしい。橋の積石の間から灌木が生へて居た里、かづらが垂れて居たりする。欄かんの一部も壊れて居る。多分多くの画家に画かれた橋であらうと想はる。橋の前後から、また両岸から眺めたが中々好い。」(藤崎 2005 p24)

鈴木貞三が描いた従軍関連の作品図版は5枚見つかり、それぞれ上海市、江西省と江蘇省の風景が描

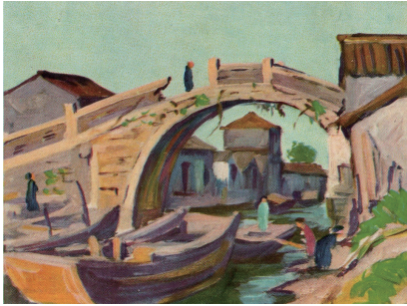
かかれているが、江蘇省の2枚とも軍事郵便の絵葉書に印刷された蘇州風景である。1枚目は④「蘇州風景」で、画面には、積石の間から草木が生え、欄かんの一部が壊れた古い石橋が描かれている。鈴木が描いた橋は、南が言う「上津橋」かどうかは確定できないが、蘇州滞在中の写生に密接にかかわる作品図版であることは間違いない。

翌日の日記には鈴木動きについて次のように書かれている。

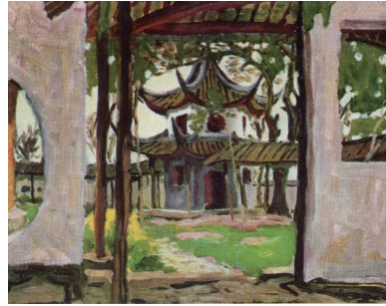
「四月九日。曇。和。……小生は昨日見て置いた橋を画く準備をする。松林君も此橋を何處からか画くと云ふ。小林、鈴木、雨田の三君は寒山寺に向かふ。」(藤崎 2005 p 26)

2枚目の絵葉書図版は蘇州の寒山寺の境内が描かれた④であるが、鈴木が小林、雨田の2人と一緒に「寒山寺に向かふ」という南の4月9日の日記内容を裏付ける1枚と言える。

④「蘇州風景」(鈴木貞三)



④「蘇州寒山寺」(鈴木貞三)



3.25 古島松之助 (ふるしままつのすけ 生没年不詳)

古島について、飯野(2005 116号 p 13)では1937年「10月中旬から下旬 古島松之助、三国久、高橋亮、清水登之、海軍従軍画家として上海方面に赴く。1938年1月26日帰京」と記されている。古島の生没年、出身などのプロフィール情報は発見されていないが、筆者収集の戦前の絵葉書の中で古島が描いた中国風景の図版は96枚にもものほり、従軍画家ではもっとも図版が多く残された画家である。96枚の図版の中で「蘇州」の名がつくものは④「蘇州寒山寺」、④「蘇州所見」と④「蘇州虎丘山の古塔」の3枚である。④はタイプ1の純粋な風景で、④④はタイプ2の時局風景である。④には水牛に乗る兵士が、④には虎丘塔風景と点景の兵士がそれぞれ描かれている。

④「蘇州寒山寺」(古島松之助)



④「蘇州所見」(古島松之助)



④「蘇州虎丘山の古塔」
(古島松之助)



3.26 松林義英（まつばやしよしひで 生没年不詳）

藤崎（2005 p 17）は南薫造の日記を整理し、一行の中国での主な旅程について「4月3日に上海に上陸、同月7日に蘇州に向かい、11日に再び上海に戻っている。蘇州行には雨田と松林も加わり、南等一行に10日まで同行した」と説明している。南の日記では4月7～9日の活動について次のように記されている。

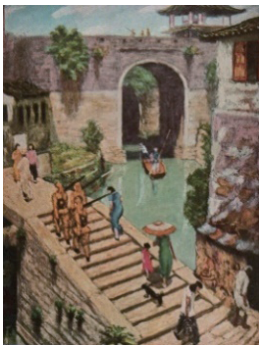
「四月七日 ……十時五十分の急行で蘇州に出発する事となって居る。準備して一個の荷物をホテルに預ける。雨田君が迎かへに来て呉れる。雨田君は我々の係として命令を受けて全じ列車で出発するのであるが、此他に美術学校師範科出身の松林義英君（旧姓日野、広島縣蘆品郡、府中。渡辺兵站付軍曹）も命令に依って全行する事になったと云って来る。」（p 24）

「八日 ……朝食を済ました處へ松林、雨田両君が迎かへに来る。雨田君も今日は銃を捨て、繪の道具を持って居る。松林君は八号画布を二枚併せて持って来て居る。純然たる画家部隊の態である」（p 24）

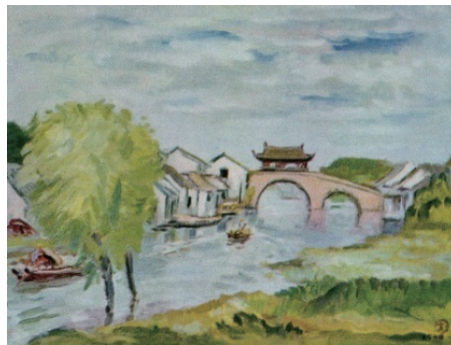
「九日。……小生は昨日見て置いた橋を画く準備をする。松林君も此橋を何處からか画くと云ふ。」（p 26）

松林の従軍関連の作品図版は全部で8枚発見され、その地域は上海とその周辺および江蘇省に及ぶが、そのうちの1枚の蘇州風景は軍事郵便絵葉書に印刷された④⑥の「聖恩無邊（蘇州風景）」である。④⑥の作品図版は南薫造の日記に書かれた松林の写生活動にかかわるものと思われる。画中の橋は「水関橋」という蘇州の名所の1つで、画面にはのどかな古都の日常風景と町を行進する旧日本兵の姿が描かれている。チャイナ服を身にまとう紳士と淑女、日傘をさした親子連れ、兵隊のそばを恐れ気味に前屈みしながら歩く婦人の姿など、戦時中蘇州の街頭風景の一瞬をリアルに写し取った1枚と言えよう。

④⑥ 「聖恩無邊（蘇州風景）」（松林義英）



④⑦ 「蘇州城外横塘の亭子橋」（武内英男）



3.27 武内英男（たけうちひでお 生没年不詳）

武内の名は、文献調査では2ヶ所に現れている。1つは東京美術学校1925（大正14）年の卒業生名簿、もう1つは飯野（2005 116号 p 22）の出征・従軍画家リストである。武内のプロフィールや従軍時期と経路に関する情報は不明である。武内が描いた作品図版は5枚発見され、いずれも軍事郵便の絵葉書に印刷されたものである。それぞれの画題には華東の上海市、浙江省（杭州）、江蘇省（蘇州、南京）、安徽省（蕪湖）が含まれるが、蘇州を描いた1枚は④⑦「蘇州城外横塘の亭子橋」である。70年前の絵葉書に印刷された図版とは言え、哀愁漂う亭子橋の風景は見る人の目を引き付け旅情をそそる。

3.28 小合保一郎（こあいやすいちろう 生没年不詳）

『聖戦美術』（1939）には小合保一郎という名の画家による洋画のモノクロ図版④⑧「蘇州獅子林」が掲載されている。「近代日本版画家名覧（1900～1945）」のHPには小合の情報について「1936（昭和11）年中井平三郎が中心となって結成された京都エッチング協会会員に名を連ねる」とだけ記載されている。筆者所収の軍事郵便絵葉書には「小倉保一郎」という名の画家が描いた戦地記録画の作品「避難地より帰る」のカラー図版が含まれている。美術関連の資料調査の中で「小倉保一郎」の情報はまったく現れてこない。当時の絵葉書に印刷された画題名や画家名にはミスプリント（例えば「永瀬義郎」が「長瀬義郎」となるなど）がしばしば見つかるので、「小倉」も「小合」の誤植の可能性がある。現在筆者が持っている小合に関する情報において従軍の記録はまだ見つかっていないが、『聖戦美術』中の中国風景作品の多くは画家たちの従軍経験に基づいて描かれたことから、蘇州獅子林を描いた小合も当時従軍画家として蘇州を訪れた可能性は高いと推測される。

④⑧「蘇州獅子林」（小合保一郎）



④⑨「蘇州寒山寺」（與條）



3.29 與條（生没年不詳）

與條という名の画家が描いた作品図版は軍事郵便絵葉書の中で4枚発見されている。図版の画題には華東の浙江省（杭州）、江蘇省（南京、蘇州）、華中の河南省（浣県）が含まれる。蘇州を描いた1枚は④⑨の「蘇州寒山寺」である。画面には寒山寺の境内でスケッチしているかまたは写真を撮っているような軍服姿の人物が描かれている。従軍画家は複数で行動することが多いので、従軍画家の作品に同行画家の後ろ姿が点景として描かれたケースは、吉田博の「杭州山上」などのように、ほかにも数枚発見されている。「與條」のフルネーム、生没年や美術関連出身校などのプロフィール情報についてはさらなる資料調査が待たれる。

4. 結び

以上、蘇州に焦点を絞り、戦前の従軍画家による戦地記録画の図版の整理と記録を行ってきた。29名の画家の49点の作品図版の発見と収集により、従軍画家たちが描いた戦地記録画の実態の一部が明らかになり、蘇州に赴いた画家たちは戦闘や戦跡よりも風景に強い関心を寄せ、情緒あふれる蘇州の水郷風景や庭園風景を多く描いていた事実が見えてきた。戦争画、戦地記録画と言え、一般的に藤田嗣治の「アツク島玉砕」などのような激しい戦闘場面が想起されるが、本研究により、これまで知られざる作品図版の発掘を通して、画家たちが従軍という名のもとで美しい風景を追い求めていた新たな一面が浮かび上がってきた。われわれは、戦争と美術との関係を探究し、日中戦争における従軍画家たちの活動実態や役割をより正確に、体系的に捉えるためには、今後従軍画家たちの戦地記録画に関する史実

の発掘をより広範囲に行っていく必要がある。

注

- (1) 戦前の座談会記録には、旧日本陸軍大尉山内一郎の次の発言が残っている。「藤田、宮本さん等に行つて戴く様になったのは極最近の事で、それ迄に随分色んな方に依頼した様に古い記録に残つて居りますが、当時は断はられた人の方が非常に多い様です。大東亜戦争が始つてからお願いした中にも、忙しいといふお話の方もあり、気の向かれない方もあつたと思ひます。或は命の危険を感じられた方もあると思ひますが、断られた方が随分あります。」(「戦争画と芸術性」『美術』8月号1944年、針生他2007年p253)
- (2) 松林(義英)と雨田(正)は現地出征中の兵士で一行の世話役を務めた者で、松林は東京美術学校師範科在学中に、雨田は油絵科予備科在学中に応召したと見られる。
- (3) 石井の「軍艦出雲」(1305×1620mm)はGHQによって接収された戦争記録画に含まれ、現在東京国立近代美術館に米国による無期限貸与作品として所蔵され、「上海油公司之戦闘」の下図「油公司の戦」(昭和十三年十月835×960mm)は船の科学館に「海軍従軍画家作品」として収蔵されている。
- (4) いまは「潢川」に改名されている。
- (5) ㊸は筆者所収の戦前の1枚刷りのカラー図版によるものだが、同作品の原画(1941年作、油彩847×905mm)は福富太郎コレクションに所蔵されている。原画は経年による変色のためか、画面全体がより黄色くなっている。

参考文献

- 飯野正仁(2005)「戦争に征った画家たち」『あいだ』(116~119号)「あいだ」の会
- 石井柏亭(1971)『柏亭自傳』中央公論美術出版
- 岩瀬俊雄、油井一人(1997)『20世紀物故洋画家事典』美術年鑑社
- 岩手県立美術館(2016)『誕生130周年記念 五味清吉展』
- 五十殿利治(2010)『「帝国」と美術——一九三〇年代日本の対外美術戦略』国書刊行会
- 加藤俊明(2016)「(五味清吉)年譜」『誕生130周年記念 五味清吉展』岩手県立美術館
- 近代日本版画家名覧(1900~1945): www.hanga-do.com/img/Hangadomeiran104.pdf
- 古城江観(1943)『南を描く』大雅堂
- 佐久市立近代美術館(1997)『特別展神津港人とその周辺』
- 佐々木一成(1986)「五味清吉の生涯」『岩手県立博物館研究報告』(第4号)
- 杉村裕哉(1996)「(清水登之)年譜」『清水登之画集』栃木県美術館
- 東京美術学校校友会(1942)『東京美術学校卒業生名簿』
- 東京文化財研究所 物故者記事: <http://www.tobunken.go.jp/materials/bukko>
- 宝木範義(1992)「青山龍水の画業について」『青山龍水作品集』剣持さゆり、西嶋鈴枝編集 株式会社ディックアート
- 手島仁(2008)「海軍従軍画家・住谷磐根」『群馬県立歴史博物館紀要』(第29号)
- 中川紀元(1941)『世路のシミ』天理時報社
- 永瀬義郎(1977)『放浪貴族』国際PHP研究所
- 長野県信濃美術館(1985)『神津港人』長野県信濃美術館
- 日展史編纂委員会(1984a)『日展史(13)新文展一』社団法人日展
- 日展史編纂委員会(1984b)『日展史(14)新文展二』社団法人日展
- 橋本善八(2010)「向井潤吉略年譜」『向井潤吉展 わかちがたい風景とともに』朝日新聞社
- 林唯一(1943)『爆下に描く』国民社
- 針生一郎他(2007)『戦争と美術1937-1945』国書刊行会
- 東中野修道(2013)「海軍従軍画家の現地通信——住谷磐根「江南画信」「続江南画信」」『亜細亜法學(48-1)』亜細亜大学
- 平瀬礼太(2002)「美術と戦争展・雑記」『美術と戦争』姫路市立美術館
- 広島県立美術館館蔵品検索HP: <http://www.hpam.jp/musecom/doui#>
- 藤崎綾(2005)「南薫造『従軍日記』」『広島県立美術館研究紀要』

- 船の科学館（2013）『船の科学館収蔵資料目録2〈海軍従軍画家〉』公益財団法人日本海事科学振興財団「船の科学館」
- 彭国躍（2013a）「南薫造『従軍日記』の図版検証——戦前絵葉書の美術史拾遺」『神奈川大学評論（74）』神奈川大学
- 彭国躍（2013b）「従軍画家瀬野覚蔵とその戦地記録画——戦前絵葉書による美術史拾遺」『人文学研究所報（50）』神奈川大学人文学研究所
- 彭国躍（2015a）「南薫造『従軍日記』の図版検証（補遺）」『神奈川大学評論（80）』神奈川大学
- 彭国躍（2015b）「幻の従軍画家三迫星洲——戦前絵葉書による図版の整理と分析」『人文学研究所報（54）』神奈川大学人文学研究所
- 彭国躍（2015c）「版画家永瀬義郎の従軍軌跡——戦前絵葉書の美術史拾遺」『人文研究（185）』神奈川大学人文学会
- 彭国躍（2017）「洋画家桜庭彦治の従軍軌跡——戦前絵葉書の美術史拾遺」『人文研究（191）』神奈川大学人文学会
- 真部俊生（1985）『服部正一郎画集』三彩新社
- 向井潤吉（1939）『北支風土記』大東出版社
- 向井潤吉（1938）「従軍画家私義」『美術』（8月号）日本美術出版株式会社
- 松本金次（1939）『聖戦画譜』美術報国会
- 安永幸一（2009）『山と水の画家 吉田博』弦書房
- 弥生美術館（1993）『林唯一』弥生美術館
- 陸軍省・海軍省（1940）『靖国之絵巻』（昭和十五年秋季大祭記念）陸軍美術協会
- 陸軍美術協会（1939）『聖戦美術』陸軍美術協会